
魔法先生ネギま！～万能なる存在～

さぁ選べ。修羅道か？回帰か？それとも永劫停滞か？……どれだ？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜万能なる存在〜

【Nコード】

N1229X

【作者名】

さあ選べ。修羅道か？回帰か？それとも永劫停滞か？……………どれだ？

【あらすじ】

最高神の娘に誤って殺された男がネギま！の世界に降り立つ。

「いやいやいやーから創らなきゃいけないとかマジでメンドイですけどー!？」

世界を創って神になっちゃうとかそんなお話。

生暖かい目でどうか寛大な心でお読みくださいm) ((m

第一幕（前書き）

暇つぶしとして書いてみました。どうぞお読み下さい。

第一幕

目が覚めたら真っ白な空間にいた。
あれ？ここどこだ？

「どつやら起きたようじゃな」

後ろから声が聞こえ振り返るといかにも威厳のある爺さんがいた。

「アンタ誰？つかどこだここ？」

「ワシは神じゃ。そしてここは神の間じゃ」

「はい？神？……爺さん病院行くのか？」

「フオツ！ちよつと待て！？なぜいきなり病院の話になるんじゃ！
？」

「いきなり神です、なんて信じる奴がいるか！てめえ頭おかしいん
じゃねえの？」

「だいたい俺は無神論者だつーの！」

「つーかアンタが神様ならどこの神話のだよ！？」

「人間の宗教なんかには当てはめられても困るんじゃが……」

「やっぱ嘘じゃねえか。」

「ほら病院行くぞ」

「いや病院行くつにもお主死んでおるぞ？」

「……………」

「ほれ体が透けておるしの」

自分の体を見る。た、確かに体が透けてるって

「ええええええええ！？ちよつ、体あ！？俺の体が透けてるう！！！！」

「ようやく気づきおったか。やれやれじゃ」

「つーか何で死んだ？」

「今度は冷静になりおったか。意外と適応力があるようじゃな」

「違ーよ、馬鹿。驚き過ぎて冷静になっただけだ」

もう何があるつと驚かんぞ。

「まあぶつちやけるとワシの娘の不手際で死んだ」

「マジでぶつちやけたな！！」

なんてこつたい。俺の人生に終止符を打ったのが神様なんて。

「はっ、俺の人生超ワロスｗｗｗ」

「何で自分で自分の人生を笑っておるのか理解できないんじゃないか……まあよいか。そしてそう悲観するでない。お主には特別この最高神自ら転生させてやるっ」

「マジで？」

「っーか最高神だったのこの爺さん。」

「マジじゃ。最高神の娘が不手際で死なせたなどさすがに不味いのでな」

「結局身内のためか！？」

「娘はやらんぞ！」

「意味わかんねーよ！？」

もうやだこの爺……

「アンタと話すと疲れるから早く転生させてくれ」

「ようやく本題に入れるの。転生する世界はネギま！じゃから」

「さいですか……能力は？」

「基本何でもいけるぞい。ちなみに身体能力最高クラスで限界突破と不老はデフォじゃぞ（まあ戦闘で致命傷を受けん限り死なない体にしとくから実質不老不死みたいなもんじゃが……）。……して何

が欲しいんじゃない？」

少し自重しろ！！

いや俺が自重すれば問題ないか？

「そいじゃあ、魔力はネギくらいで気も魔力と同等。

能力は錬成改造。こいつは材料さえあれば何でも作れる能力ってことで。

もう一つは伝勇伝の『すべての式を解く者』の能力をデメリットなしでくれ」

「最後のだけ完璧にバグチートじゃな」

てめえが言うな！！？

いやお前も大概だから（笑）

ん？なんだ今のは？電波か？

「あいわかった。ついでにありとあらゆる材料が入った倉庫も付けよう。……あとは転生させる時代じゃが、いつがよい？」

「そんなのも選べるんだ。そうだなー……………」

時代ねえ。どうせだったら……………」

「なあ？俺の能力で世界って創れるか？」

「可能だとは思うが……………おままさかッ！？」

第二幕

「……………んあ？」

目が覚めたら真っ黒な空間だった。

……………この前振り前にもやったような気がする。

まあ気にしないでおこつ。

さて、どうやらちゃんと転生することができたようだ。

周りが真っ黒なのに自分の体が見えるのは何でだ？

……………まあ、深くは考えないでおこつ。

「それにしても見事に何も無いな……………」

つーか、ここもしかして宇宙空間？

それなら何で俺は息ができるんだ？

……………謎だ。

人をやめたつもりはないんだけどなあ……………

閑話休題

さて、あまり深く考えるのはやめよう。

神の爺さんが送った場所ならここはネギま！の世界で、まだ星も存在していない時代。

時代って言っているのかわからないけど……………

「まあ能力で世界創るんだけどね……………」

何はともあれ、まずは能力を使ってみるに越したことはない。

「え〜っと、たしか倉庫がどうとか言ってたような気が……………」

手を真っ黒な空間に突き出し何かの手を突っ込む動作をする。

「う〜ん…………お？これか？」

手に感じた感触を確かめながらそれを引っ張り出す。

出てきたのは材質不明キラキラ光る金属だった。

何これ？倉庫から引き出したのは摩訶不思議の金属って…………

…………まあいいやこれで星でも創ろつと…………

手に持った金属をとても細かく千切り、歩きながらそれを周りに投げっていく。

金属なのに手で千切れるとかはなしで頼む。

かくして俺の天地創造が始まった。

あの金属を千切っては投げ千切っては投げを繰り返し、どれくらい時間が経っただろうか？

手に持つ質量は今だその存在を主張している。

というより減ってるのかこれ？

あきらかに重さが変わっていないような気がするんだが……………
すでに周りは、淡く光り輝く金属が辺り一面に見える。

「何か新しいものはないかなあ……」

金属をその場に置き倉庫に手を入れる。一度やったことだから忘れるはずがない。

案の定、倉庫の中で手に何かが触れそれを握り締め取り出す。

「……？これは何だ？」

見たところ今度のは液体の入った透明な瓶だった。液体の色もこれもまた透明だった。

まあ何でもいいや。そう思い瓶の蓋を開け中の液体を周囲の金属に振り撒く。
すると……

シューウウウ……

光り輝く金属は溶けて粒子になり、先ほど置いた金属を中心に周りを囲み込んでいく。

「え？何これ怖い……」

やがて置いてあった金属も粒子となって溶けていき、次第に丸い固形物に変わっていった。

……つーかでかいな。直径50mくらいあるんじゃないか？

何てことを考えてたら引っぱ張られた。

何にだって？決まってる。目の前の固形物にだよ。

「おっとっと……」

急いで体勢を地に足を着けるよう変える。

シュタツ

着地……そのまま立ち上がる。

「それにしても極めて奇妙だな……てつきり恒星かと思ったたら実は惑星だったとは。というか恒星兼惑星的な星か？」

何だその不思議な組み合わせは？

……まあ材料が材料だったしいいや。

重力とかもほとんど感じないし……

とか思いながら今だに光り続ける恒星兼惑星を特殊な複写眼アルファ・ステイグマで調べ始めるのだった。

第三幕（前書き）

この小説には独自解釈とオリジナル設定があります。

読者の方々に嫌悪感を催すものがあれば見ないことを進めます。

御了承くださいm()m

第三幕

この星を創ったときに使った金属はどうやらオールスパークだったらしい。

最初それを知ったときは、それなんてト〇ンス〇オーマー？と思った。

……まあ中身はまったく違ったモノだったかな。

あらゆる世界に関する叡智、それが星を創るさいに材料にしたオールスパークの中身だった。

これには驚いた。なんせ自分の欲しい知識とか入ってる金属を材料に使ったんだから……

ん？能力を持つてるんだから魔法とか使わなくてもいいんじゃないかって？

バカヤロー！魔法を題材にした世界に来て魔法を使わないのは、その世界に対する裏切り行為だろうが！？

コホンツ、話を戻そう。この星を創るさいに使った金属、オールスパーク。そいつの中身を手に入れるために魔眼を使った。つまり何が言いたいのかというと

「どうしてこうなった……」

オールスパークの中身はぶっちゃけ型月の根源のような代物だ。そいつを解析した結果、見事にポツクリ逝った。

冗談でもなくマジで……

あまりの情報量の多さに脳の回路が耐えられなかった。

だがしかし、気付いたらなぜか生きていた。

今度は自分を解析した。そして何故自分が生きていたのか判明した。どうやら俺の体は戦闘で致命傷を受けない限り決して死なない体だということわかった。

そしてもう一つこっちの方が重大だ。

アルファ・ステイグマ
特殊な複写眼が進化した。

その理由が根源を解析することができてしまったおかげで進化したようだ。

例えるならア○モンが序盤でいろいろ段階素っ飛ばして究極体にワープ進化した感じ。

もう一度言おう。

どうしてこうなった

さて、この新しい、え〜と…根源を解析した眼だから、アルファが根源…いや原初か？でステイグマがたしか…聖痕？だったからアルファ・ステイグマ原初の聖痕か？

…まあなんでもいいや。

この能力、進化しただけあって結構チートだ。前の能力なら、存在を解析、解除する能力だった。

しかし今は根源を解析し進化した結果、あらゆる存在を解析、解除、構成する能力となっていた。

ぶっちゃけ言う空間だろうが時間だろうが概念だろうが何でもかんでも解析できるし、解除・構成ができる能力ちから。

危険すぎて迂闊に使えんわ！

まあ制御ができたのが唯一の救いだっただ。

これで制御できなかつたら絶対に封印してたわ……

閑話休題

さて、この構成という能力はとても便利なものだ。

俺の能力、錬成改造は材料があれば何でも作れる能力だが欠点がある。

加工しなければいけないのだ。

オールスパークを千切れたのは恐らく錬成改造のおかげで材料を加工するという行為アルファ・ステイグマだったからだろう。

だが、進化した原初の聖痕なら加工の工程をしなくても済む。

何故なら材料の式を解除した後、粒子となったそれらを用いて構成すれば創れる……はずなのだがこれにも問題がある。

粒子になっても材料として機能しているのかどうかわからないのだ。さて、どうしたものか……

第三幕（後書き）

自分で書いててなんですけど設定がすごく厨二ですね（笑）

第四幕（前書き）

設定甘すぎたあ！！

うわヤバイ厨二すぎて死ねる！

それでも書いて見ましたので読みたい方はどうぞご自由に。

前にも言いましたがこの小説には独自解釈とオリジナル設定があります。

それでも読みたい方はどうぞ。

再三に忠告はしました。

まあ恐らくその理由はこの星を創り出すときに使った水だと思う。
あとでわかったことだがあの水は流動の概念を持った水だった。

流動とは、流れ動くこと。または移り変わることを言う。

移り変わる、つまり変化していくのだ。

だから恐らくこれは変化しているのだろう。

プラネット・スターこんげんのきおくから生まれる粒子は長い年月を経て集まり数多
の新しい命ほしが生まれる。

というわけだ。

閑話休題

さて、俺が最初に言った武器が欲しいの発言は割りと本気だ。
理由？そんなのなんとなくだが？

長い時を生きるんだから自重するわけじゃないか？

というわけで作ってみることにした。

完成！（はやっ!?!?）

いや、アルファ・ステイグマ原初の聖痕使って作ったら数分で終わったよ。俺もビク

リだわ。

すごいよ、この原初の聖痕アルファ・ステイグマ!!!さすが特殊な複写眼の進化形態!
!!!!!!

うんゴメン……………さすがにこのネタはなかった。やっぱり多少なりとも自重して生きていくよ……………多分……………おそらく……………きつと……………メイビー……………

まあ気を取り直して武器の説明をしようか。

形は魔法世界のキーアイテム、最後の鍵の白バージョンである。
アルケミテロスマスターキー
名前は始まりと終わりの鍵と名付けた。

こいつの材料は根源から一番適切な材料の情報を引つ張り倉庫から取り出して造った。

材料の例を一つ上げるとしたら某王国の心に出てくるアレである。

なんで入ってたんだろう？

まあいいさ。

性能で言うなら俺が読み取った根源の情報をコピーしたので、あらゆる存在に問答無用で干渉して意のままにできる能力である。
コード・オブ・ザ・ライフメイカー
簡単に言つと造物主の掟の超上位互換みたいな。

……………よくよく考えればなんつーもんを造つちまったんだろう。

ちなみに見た目に反して武器としても使えて優秀である。
キーブレードからできていますから（キリッ）
とまあこんな感じで武器の説明は終わりにしようと思つ。

……………結局俺は誰に話してたんだ？

第五幕

そついえば俺がこの世界に来てどれくらい経つたのだろう？

宇宙ができたのは前世の俺の時代から約150億年くらい前だと聞いた事がある。

そして一番最初の星ができたのは約137億年くらい前だと聞いた。俺が来た時はすでに宇宙空間はできていた。

ではプラネットスターはもしかやファーストスターなのだろうか？

うん………わからん。

まあそれはさておきゞ(。ロ。(ヲイツ

俺が始まりと終わりの鍵を造ってからだいたい数百万年の時間が流れた。

なぜそんなことがわかるかと言うと………

懐中時計を作ってみたのさ

うんやっぱ時計がないと時間がわかんないな〜っと思って作ってみただがこれがなかなかかっこよくてね。

今ではお気に入りの一つだよ。いつも首に掛けて持ち歩いている。

閑話休題

毎度思うんだが、仕切り直す時っていつも上の言葉だよな。

メタな発言はやめいby作者

うん？なんだ今のは？まあいいや。

とりあえずあの鍵の能力は、創造神の掟と名付けた。「ト・オブ・ザ・クリエーター」

実は最初、創造主にしようかと思っただけどやめた。

別に深い意味はないよ？まあなんで創造神にしたかと言うと……

ぶつちやけ創造主と造物主って似ているから一線を画す意味で創造神にただけ。

まあ能力が造物主「ト・オブ・ザ・ライフメーカー」の掟の超上位互換なので名前のニュアンスはおそらく間違っではない。

というわけで鍵についてはこのぐらいにしておこう。

最近気付いたんだが、俺魔法使ってなくね？

というわけで魔法を使ってみようと思う。

鍵から魔法に関する情報を引っ張り出し、今使える魔法を調べる。

えーっと……？ネギま！のは精霊が必要だから今は無理……型月の触媒やら何やら必要それで面倒……となると伝勇伝が無難か？

ということとで情報をもとに実際にやってみる。

星から出ている魔力素を集め、指で魔方陣を編み詠唱を行う。

「『求めるは雷鳴>>>・稲光』」「くわいひくわい」

そして編まれた陣からは雷撃が放たれた。

「おっ、成功だ」

アルファ・ステイグマ
原初の聖痕を使って解析、その構成を読み取る。

……どうでもいいけど、伝勇伝の魔法って便利だよな？

とりあえず根源から伝勇伝の魔法に関する情報を解析してそれを実際に使っていく。

「うわやべーよ何これ楽しすぎる……」

リユーラ・リユートルーが幼い頃から魔法にのめり込んでいた理由がよく分かる。

楽しい。その一言に尽きる。

まさか魔法というものがここまで面白いものだとは思わなかった。

「え〜っと、ここの式を簡略して……うしっ！できた！！」

今はいくつまで魔法を展開できるか試しながら式の省略をしている。ちなみに今の俺が魔方陣を展開できる数は同質のものなら20個、属性の違う魔法ならその半分、さらに3つ以上なら6個まで展開できる。

アルファ・ステイグマ
いや〜ホント、原初の聖痕マジ便利WWW

第五幕（後書き）

伝勇伝の魔法は空間に存在する精霊のような存在に指先で干渉してそれを並べ思想力、つまりイメージすることで発動します。

この時のイメージが伝勇伝では魔力とされています。

ですが本作品では魔力がという概念があるのでネギま！の魔法に似た異なった魔法とします。

具体的にはネギま！系の魔法は術式で精霊使役するが伝勇伝系は精霊が術式の役割をするというようにします。

よくわからないと思いますが実際のところ考え方は人それぞれなのであまり気にしなくてもいいです。

それではまた。

第六幕

魔法を使って数十億年。

ここ数十億年は自分で考えたオリジナル魔法を試しながら時間を過ごした。

そして調子に魔道書なんてもの書いたらそれがとんでもない代物になった。

何をしたかって？ 根源にある魔法や自分の考えた魔法に関することをすべて書いただけだよ？

いやな？ 最初は出来心だったんだよ？

解析した魔法を腐らせんのもあんまりだから書いてみたわけよ？

倉庫から材料引っ張って作った絶対にページがなくなるないノートを使ってわざわざ作って書いたわけだよ？

結果？ 宝具クラスの魔道書の完成だよ？

しかも断トツでEXランクの代物だと断言できる！

なぜかって？ だって内包魔力がおかしいんだぜ？

明らかに今の俺が持つ魔力の内の3分の2はあるんだぜ？

自慢じゃないけど俺ってかなり長生きしてるから最初と比べてかなり魔力やら気やら増えてんだぜ？

具体的に言うなら星が持つ無限とも言える魔力を5、6個ぐらいだぞ？

その内の3分の2だけ？

アルファ・ステイグマ

原初の聖痕で解析してそれがわかったときはY A R I S H U

G I T A と思った。

で、結局どうしたかって？

封印に決まってるんだろあんなモン！！！！
マジで危なすぎて使えんわ！！

ちなみにこの本には魔力を流すとその魔力を認識して使用者と認める魔法を掛けてある。

しかも詠唱や呪文を言わなくても頭の中でその呪文を唱えれば本に書いてある大魔法から個人発動まで何でも使えるとか言う優れたものだ。

さらに攻撃魔法はどれも当たっただけで発狂死確定だったり、次元破壊可能だったりと鬼畜を通り越してもはや変態的な威力を誇ったものがわんさか書いてある。

他には不老不死化の魔法とか蘇生魔法やらが書いてあったりと禁術の域を4つ、5つ通り越したレベルの代物ばかりだ。

ちなみにその際使う魔力だが、これは本に魔力を循環させる機能を途中から取り付けたことよって魔道書の魔力を循環させ増やしていくことができるため使用者は最初の魔力を流す行為以外魔力を使わないというまさしく魔道書にあるまじき反則機能の盛り込みの品なんだが……

実はこれ、魔道書の内容を把握しておかないといけなかったため頭がかなり良くないと使えない。

そしてもう一つ実を言うところちが本命なんだが。

これを使うには根源に辿り着ける資格のあるものじゃなければ無理という魔法を掛けた。

理由？んなもん解析した結果資格のない奴が無理に使おうとしたら発狂確定、悪くてそのまま死亡、良くても廃人は避けられないからだ。

そもそもこの魔道書に書いてある魔法は俺が書いたオリジナルの魔

法を除けば根源からサルベージした魔法ばかりだ。

俺は魔法というものはとても強力な毒なんじゃないかと思う。

普通の人間がそんなもの扱えるかと言えば無理だ。なんせ毒まほうを扱えるものなんて大抵が術者である。

そして根源に関わる毒まほうなら資格たいせいのない奴など一発でアウト、精神が逝く。

そして様々な世界に登場する魔法はそういった神秘つまり幻想における格が低いからだというのが俺の考えだ。

なので最低でもこの魔道書を扱うには根源に辿り着ける資格があるものと決めた。

え？俺は大丈夫なのかって？

精神は肉体が戦闘以外じゃ死なないため無理。

ついでに原初アルファ・ステイグマの聖痕のおかげで心身に害をなす毒は効かないため問題なし。

とまあ俺の持論はこれで終わりにしようと思う。

最近地球ができたことを知ることができた。

それがわかったのは首に掛けた懐中時計を久しぶりに見て俺がここに来て何年ぐらい経ったかを調べたからだ。

調べた結果宇宙が誕生して数百億年たち今は地球が生まれて数億年経ったぐらいだった。

あれ？ということは何も俺ってもう100億越えの爺さんなんじゃ……

…？

………ま、まあ気にしないでおう(汗)

ちなみに俺が今いる場所は根源世界と言われているところだとそのとき知った。

外に向かつて変化を起こすのが平行世界と言われるものであり、あらゆる可能性を持つ変化のない世界のことを根源世界と言うらしい。わかりにくいのが木で例えるところなら一番太いのが根源世界でそこから伸びる枝なんか平行世界という解釈をすればいいと思う。

で、その肝心の平行世界の創られる方法がこの淡い光を放つ球体型の固形物プラネット・スター、そこから生まれる粒子、つまり根源から出てくる記憶が根源世界から外に向かつて行き記憶しゅつしによって世界が形成され生まれるという寸法だ。

そして根源世界と平行世界の間には何千、何万、何億、何兆という仕切りのようなものが存在している。

そしてこの仕切り、どうやら世界と世界を繋ぐ境界であり、また平行世界が逆流しないようにするためのものでもあるそうだ。

そして世界を移動する際はそこを通り抜けなければならぬと言う情報を手に入れた。

とは言っても俺には鍵があるため移動するなら原作のリロケートの超上位互換でも使えば問題ないんだが……

まあ初めてだから一度通ってみるのもいいかもしれないな。

・
・
・
・
・
「さっさと行くとしますか」

準備万端。えっつとネギま！の世界の境界の壁はどれだ？

アルファ・ステイグマ
原初の聖痕を使い周囲を解析することでネギま！の世界の境界を探
す。

………おっ、ビンゴ！めっけ！！

とりあえず境界まで勢いよく飛んで行ってそのまま………

バリッ、バリバリッ！バリント！！

何層からも生る境界の壁をぶち破りそのまま平行世界まで飛んで行
った。

第七幕（前書き）

今回はいきなり大展開！

どうしてこうなった？orz

戦闘描写入ります。

第七幕

俺が境界の壁をぶち破ってからまた数十億年ほど経った。

今だに平行世界に着くことはない。

むう、やっぱり鍵使って行けばよかったか？ だけど今更使う気にもなれないし……

あゝでもこのまま行くのも面倒なんだよなあ……ッ！？

なんて考えながら飛び続けていたらいきなり背中に悪寒が走り本能が警告を発した。

いますぐここからハナレロ、と……

瞬間俺はその場から消えるように飛んで行った。

直後……

ピキッ、ビキビキッ！ビギー！

後ろを振り返って見れば、音も気配もなく俺が先ほど飛んでいたであろう場所に変化が起きた。

空間に亀裂が走る。この真っ暗な空間で見ることかなわないが^{アル}原^{アル}初^{アル}の聖痕を使っていたためそれを知ることができた。

そしてその場所は空間に入った亀裂に従って……割れた。

パキーンッ！！！！

割れた空間からは何か得体の知れないものが出て来ている。

それを原初の聖痕で解析しようとするが……

アルファ・ステイグマ

「うっ……!?!?」

いきなり吐き気を催し、意識を何かか蝕み気が狂いそうになる。

「なん……だ、これ? きもち……わる……」

しかしそれを何とか押さえ込み解析を始める。

「……おい……おい……何の冗談だよ、これ……」

解析した結果得体の知れない物体の正体がわかった。

暗愚の実体

形なく、知られざるもの

沸騰する混沌の核

だが俺ならこう言う。

無限の中核に棲む原初の混沌

その名は

アザトース。

クトゥルフ神話における邪神側の親玉とされている存在。
かの神話に出てくる旧支配者たちの大半はこのアザトースが生み出したとも言われる。

いやそもそも最初から最後まで夢じゃないよ(笑) by 作者

「てめえは消えろ!!! って、あぶね!?!」

余所見すんなよ) . . . (by 作者

..... もう何も言わん。

アザトースから伸びる触手を避けていき、無理なものは殴って吹っ飛ばさ... いや消し飛ばすの間違いだな、うん。

いくら消し飛ばしても相手は無限に増殖する存在。現に秒単位で増殖していき、その大きさもさつきまでとは比べ物にならないため逃げながら戦うはめになる。

ぶっちゃけ言つとこれ無理ゲーじゃね？

なんて考えてたらさつきから襲い掛かってくる触手が五割り増しとなつてやつてきた。

..... おいてめえ、知恵がないって言われてっけどそれ絶対嘘だろ？

とか思いながら鍵を取り出し奴の存在に干渉する。

「『ロード・オブ・ザ・クリエーター
創造神の掟』!」

瞬間アザトースの無限増殖がピタリと止まる。
アルファ・ステイグマ
すかさず五割り増しした触手を鍵で薙ぎ払いつつ原初の聖痕の構成
を使い魔方陣を構築する。

その数なんと1億。

それらから一斉に極太の光線
間なく放たれる。

光燐が前面に隙

え？詠唱？真言法？

……そんなものを使わなくても魔法は使えるんだぜ？

アルファ・ステイグマ
原初の聖痕チートすぎね？by作者

今日はよく電波を受信するなあ。

光燐はすべてアザトースに当たり、その質量を削っていく。
このまま行けばその内死ぬんじゃないかね？とか思った。

ところがギツチヨン。

「はあ！？」

アザトースは創造神の掟の干渉を振り切ってまた無限増殖を始める。
コード・オブ・ザ・クリエーター

さすが神。やることなすこと汚さすぎる。
また増殖した触手に魔方陣を叩き割られるが、もう一度干渉し増殖
を止める。

つーかこれ永久持続性なのになんで抜け出せたんだ？

神だからさby作者

今日は本当によく受信するなあ……

残った魔方陣を使い先ほどの五割り増しの大きさの光燐を放つ。

さらに鍵を使い触手を薙ぎ払い消滅させていく。

しかしそれでも減らない。

つーかいい加減メンドくなってきた。

「いつそのこと解除するか？式の解析はやったからできるはずなんだが……」

それとも逃げるか？

いや逃げてもいいんだけどそれだとこいつ追って来るかもしれないんだよねえ……

こいつって盲目で知恵がないはずなのに襲い掛かって来てる時点でもはや異常、しかも確実に俺を襲ってきている。

だとしたらこいつを放って平行世界に行けば俺を追ってくるかもしれない。

そんな無限に増殖する奴を連れて行ったら間違いなく世界が壊れるし俺も一生追い回される。

そいつは嫌だ。あんな言葉にするのもおぞましい奴に追い回されるとか無理、生理的に無理。

というわけでやっぱこいつ消す。

とは言っても普通に解除しただけじゃたぶん消せないためあいつはアルファ・ステイグマ原初の聖痕に進化したことで使えるようになったとおきで消そうと思う。

瞳に虹色に輝く五芒星が浮かび上がり、右手の甲にも五芒星が浮かぶ。

そしてその右手の掌を奴に向けるよう前に突き出す。

アザトースの存在の因果すらも見通してそれを解析、存在に起因する因果を

「『アルファズ・イニシャルイズ
零・初期化』！！」

解除することでその存在を因果から無にする。

そして奴は存在を解除された。いや正確には無にされた。

因果から無にすることはそれに関係するものも消え、それを認識することは俺以外できなくなる。

あらゆる存在を因果から無にすることができると、アルファズ・イニシャルイズ零・初期化。使った本人が言うのもあれだけど危険すぎるわ！

だいたい因果から無にするとか汚いにもほどがあるだろ！

命の危機に陥ったとき以外使わないでおこう。

この能力って因果から無にすると構成でも元通りにできないんだよね。

なんせ無なわけだし、構成しようにも構成に必要な有ゆうがないからできないということだ。

でもって……

なんでアザトースはこんなところにいたんだ？

第七幕（後書き）

アルファズ・イニシャルイズ

零・初期化

説明

作者が考え、この小説の主人公が使った、たぶんこの小説で一番のチート能力。

どんなものにも因果という原因と結果がある。

この能力はその因果を見通して解析、解除するものである。
まさしく反則^{チート}と言えよう。

第八幕（前書き）

やっちまったぜ！

厨二設定の入った神のTOU JOU DA!!

第八幕

あのと神から連絡があった。

なんでも、アザトースを因果から無にしたためクトゥルフ神話に出てくる神の大半が因果から消えたらしい。

で、さすがに邪神側の親玉と間接的とは言えその眷属を消したのはなんかいろいろ不味いらしい。

なんでも平行世界に存在する空いてしまった神の席がたくさん出来てしまい処理するのが大変。

そこでの神、しんじ平行世界に存在する空席を排除して残った神格を俺に付けるとか言いだしやがった。

つまりどういふことかと言つと……

俺、アザトースを消す。

奴の眷属の神が消えた。

残ったのは神格だけ。

残った神格を俺に付ける。

俺、神になる。

と　い　う　こ　と　は　……………

・
・
・
・

存在からしてふざけてるだろ？

普通に戦ってもあの爺の性が武神なため無理。

昔あの爺が最高神になって他の神が反乱を起こしたとき指一本で鎮めたらしい。

どんだけ強いんだよ……

さて俺が神になってまたも数十億年。

人間が生まれるまであと少しというところまで来た。
しかし俺は今だに境界にさまよっている。

な の で……………

テツテレツテツテッテ

「『アルケーテロスマスターキー始まりと終わりの鍵』！……………はずい……………」

ま、まあ気を取り直して…………

「『リロケート。アステル』」

あ、アステルってのは最高神ついでの娘さんがくれた名

そして俺は平行世界へ転移した。

アステル「はあはあはあはあ……この小説を読んでく
れている、皆様。これからもよろしく願います」

作者はログアウトしました。

第九幕（前書き）

駄文です。

少々情報不足で悩んでいます。

注意この本文は修正しました。

.....

いや違うんだよ。ちょっとノリで神様の力ってどれくらいかなって
思ったから試してみただけなんだよ？

技名だつてただ神のカードと言われた三幻神の合体技を神繋がり
でリスペクトしてみただけでまさかこんなことになるなんて.....

「思わなかったんだ.....」

先ほどまで銀河系を形どつてた無数に輝く星々は塵となつて一瞬で
消え、暗黒の空間のみそこにあつた。

「やりすぎた.....（汗）」

まあすぐに直せるんだけどね？

鍵を取り出し創造神の掟カード・オブ・ザ・クリエーターを使って世界に干渉し時間を巻き戻す。

アルケーテロスマスターキー
始まりと終わりの鍵はこういう事にだって使えるのだ。

「ほい完了。さてと、そろそろ地球に行くとしますかね？」

そうして俺は無数の星を背に地球へ向かった。

あれ？地球ってどっち？

ようやく太陽系まで来ることができた。

ここに来るまでは何度か行き先を間違え結構大変な目にあった。

……………宇宙怪獣って本当にいたんだね。

さてそんなことは置いて…現在は小惑星帯アステロイドベルトにまでやって来ている。

近づいてくる小惑星は素手で破砕して地球へと向かう。

ようやく火星まで辿り着くことができた。
そういえば魔法世界って火星を基点に創られた位相空間だったけ？
もうできてんのかな？気になるなあ……………

……行ってみつか！

そう思い行き先を変え火星に降り立つことにした。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

火星に降り立ち調べてみたが、そんな空間は創られてなかった。

残念……

「やっぱまだなんもなかったか……」

火星に降り立つてからすぐに原初の聖痕アルファ・ステイグマを使ったが、やはり時期的に魔法世界が創られたのはもうちょっと後だったようだ。

とはいえせっかく来たのだから何かしようかなあ、なんて考えていたが結局何も思いつかず地球に行くことにした。

地球に着いたら造物主ライフメイカーでも探してみようかな？

そう思いつつ地球へ飛び立った。

S I D E E N D

第十幕（前書き）

ようやく完成しました。

後半部分はオリジナルです。

文が所々おかしいと思えますができれば気にしないで下さい。
ではそつぞ。

第十幕

アステルSIDE

地球に降り立ち俺が最初にしたことは造物主探^{ライフメイカー}しである。
理由？そりゃ興味があるからさ。
なんと言つても造物主^{ライフメイカー}はこの世界では始まりの魔法使いと言われている。

魔法使いの歴史がいつ頃からあるかはわからないが、少なくとも2600年から後というのはありえないと思う。

造物主^{ライフメイカー}が、えつと誰だったけ？……ナ、ナ、ナ……あつ！そうだなぎだ！！

ナギに対して2600年の絶望がうんたらかんたら言つてたのは覚えてる。

ちなみに他の原作の部分は覚えていないのにその部分を覚えてるのは印象に残っているからだか……

何はともあれ現在B.C.3400年。

最初の文明開化の時代である……
さーて、造物主^{ライフメイカー}でも探しに行こう。

そうして俺が造物主^{ライフメイカー}に出会ったのはそれから100年後のことだった。

SIDE OUT

しかし私たち魔法使いにそんなものは当てはまらない。
魔法使いは魔力を用いて精霊というものを使役し、魔法を扱そんざいう者。

日々の生活を手助けする魔法があれば、人を簡単に殺すことのできる魔法もある。

当然目的地に着くのも魔法を使えば簡単に辿り着けるし、手間も掛からない。

荷物も魔法発動体と食料があれば問題ない。

敵を相手にしても魔法を使えば簡単に倒せる。

簡単に言ってしまうと魔法使いとは最高の駒なのだ。

だからこそ奴らは、国は、魔法使いに接触した。

最初の頃は私たちも断り続けた。だが国はしつこく我々に誘っていき、最後には折れた。

それは関係ない人々の実態をまざまざと教えられたからだ。

この国は戦争に負け続けていた。そして金や人材が不足し、生きる為の食料も奪い合うようになった。

魔法使いは普通の人と違い魔法を使うことができるため生活に手間が掛からない。

しかし魔法を使えない人たちは私たちなんかよりもずっと手間が掛かる。

食べ物一つ手に入れるのにも命がけなのだ。

だからこそ私たち魔法使いは国の申し出を引き受けた。

この国の人たちが幸せに暮らすことができるようにと思ひ……………

戦争が始まりすぐに終わった。

魔法を使えば戦争などすぐに終わる。

魔法使いに対抗するには同じ魔法使いでなければ無理なのだから当

然といえは当然だが……

その後も、何度も戦争に参加し、その都度勝ち続け私たちは英雄と言われるようになった。

もちろん魔法使いであることを知っているのは国を動かす一部の者だけで民が知るはずもないため私たちは腕っ節の強い猛者という風に見られていた。

民の暮らしは前とは違い活気に溢れていた。

そしてそれが起きたのは、しばらく経ったある日のことだった。

とある魔法使いの暗殺が原因だった。

暗殺されたのは変わり者が多い魔法使い達を率いてくれる男だった。そして魔法を使う腕も私たちの中では一番であった。

そんな彼の死に残された魔法使いは泣いた。

そして誰がやったのかすぐに調べだした。

しかし調べても調べても彼を殺した者に辿り着くことはできなかった。

そしてある魔法使いが「もしかしたら彼を殺したのは魔法使いじゃないか？」と言った。

初めは皆半信半疑だった。

「なにを言ってるんだ？」「馬鹿げてる」など他の魔法使いたちも言っていた。

しかし疑念は確信へと変わった。

魔法使いをもとに調べていけば、あの魔法使いが言ったように魔法使いがやったことだとわかった。

しかし誰がやったかまではわからなかった。

よほどそれに特化した魔法使いだったのだろう。

そしてこの日を境に魔法使い達はお互いを疑い始めた。

そこにあつたのは彼を殺した者を探し出すのではなく、次は自分か
もしれないという怯えからの疑いであつた。
そしてそれはこの国の権力者らにも耳にも入つた。

あの日から二年の月日が流れた。
私死んでしまつた彼の墓から帰つたときだ。
国が燃えていた。

原因はこの国の権力者たちと魔法使いたちによる内乱であつた。
国の権力者たちは魔法使い達の実状を耳にした後、魔法使いを恐れ
た。

「もし魔法使い達が自分達に牙を剥いたら」と。
そうして彼らは密かに計画した。

魔法使い同士を殺し合わせるよう仕向けたのだ。
あの手この手で魔法使い達にさまざまな情報を流し、魔法使い達の
耳に入るようにした。

しかし魔法使い達も馬鹿ではない。
権力者の虚実を見破り、逆に下克上を考えた。
そうして今回のようなことが起こつた。

私も急いで駆けつけたがすでに彼らはお互いを殺し合つていた。
周りは体のどこかしらがなくなつて無数の死体が転がっており、
まるで地獄絵図だつた。

なぜこんなことに？

死への怖さから不老不死となった。

魂の劣化を恐れて永久に変わることのない不滅の存在となった。

恐怖から我はさまざまなことを学んだ。

そしてこれらすべては我が行うのに必要なことでもあった。

超膨大な魔力を使い、別の星を基に仮想空間を創ること。

魔法によって創り出す幻想世界、その名も魔法世界。ムンドウス・マギクス

我と同じ魔法使いを迎え入れる楽園を創造するためのが私の目的。

だからこそ我はやらなくてはならない。

普通の人間と同じように魔法使いにも平穏と安寧が必要なから

.....

S I D E E N D

第十一幕（前書き）

中間考査と修学旅行でしばらくの間投稿が遅くなります。

第十一幕

アステルSIDE

「……………見つけた」

長かったなあ、見つけるまでホントに。

数百年前は何故かもう存在していた魔法使いと一緒に行動したり、知らないうちに魔法使いがどんどん増えてたり、弟子取ったり、どつかの国に魔法使いの存在を知られて接触されたり、戦争の手伝いしたり、あげくにその戦争が面倒になって国の奴らと話し合って国から出ることを伝えたら暗殺されそうになったけど逆に返り討ちにしてそのまま死亡偽装したりと、よくもまあここまで波乱万丈な生活をしたもんだこの数百年。

…なに今更だつて？デスヨネー

とはいえようやく造物主ライフメイカーを見つけることができたよ。

いや造物主ライフメイカー探しますよ宣言してから数百年経ってるのは認めるけどしょうがないじゃん？

昔同行してた魔法使い達を解析したけど魂が不滅の奴なんていなかつたんだよ？

アルファ・ステイグマアルファ・ステイグマ　ライフメイカー
いくら原初の聖痕でも造物主の名前の特定は無r…あ……始まりとアルケーテ
ロスマスターロスマスター　終わりの鍵があった。

ま、まあ気にしないでおこつ……………（汗）

閑話休題

問題の造物主だが魔力に物言わせて遠見の魔法を使い世界中を見て
アルファ・ステイグマ
原初の聖痕で解析した。

遠見の魔法の使い方が変だが気にしちやいけない。

地球を一周して自分の背中が見えたとかも気にしちやいけない。

気にすんなよ？

さて、とりあえず造物主ライフメイカーの所に行くとしようか。

「『リロケート。アステル』」

便利だわ、リロケート（笑）

俺のは文字通り世界単位できちやうけど……

宇宙の端から端まで行けるんだぜ！

「ちよ、おい、やめ！……って、あぶなっ！……」

「問答無用！死ねい！！」

迫りくる魔法を次々と避け出口へ向かう。

というより飛んでくる魔法全部が原子分解魔法ディスインテグレイトなんだが！？

しかもそれを詠唱もしないで使うとかさすがライフメイカー……って、掠った！？今頭に掠ったぞ！！？

いくら俺でも原子分解魔法なんて喰らったらすすがに痛いわ!!

冗談言っていないでマジでどうしようか？

いやそもそもなんで俺は造物主に追われてるんだ？

回想行ってみようか

.....
「よっと、到ちやk」貴様どこから入ってきた？」.....

声の発信源の方に振り向くと、丈の真っ黒なローブで体全体をスッポリと覆った魔法使いがいた。

.....
造物主発見

「いやいや入り口からに決まってるんだろ？」

「惚けるな空間転移で来ただろう」

「俺の出入りする所が入り口だ」

「頭がおかしいのではないか？だいたいこの工房には認識障害と転

移妨害の結界が何十にも掛けてある。私の工房を空間転移している時点で貴様が並みの魔法使いではないことはわかっている。……もう一度聞こう。何のためにここに来た？」

うくんさすが造物主ライフメイカー、屁理屈並べてみたが見事に言われた。

「なんのためか、か………しいて言うならお前に会うことが目的だ」「貴様………知っているのか？」

何のことだがわからなかったが、すぐに魔法世界のことだとわかった。

「お前が幻想世界を創ろうとしていることか？」

「ッ！？………そうかならば知っているのか。ならば仕方がない」「

そう言って造物主は背後に魔方陣を展開………つて、魔方陣！？」

「これ以上情報が漏れるのは厄介だからな………死んでもらおう！」「

そうして造物主ライフメイカーの背後から魔法が飛んできた。

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
回想終了……って、俺が原因か！？

「何を考えているか知らんが余所見をしていていいのか？」

「ッ！？やっぱ！！？」

散々逃げ回っていたが気付いた時は目の前に壁が存在していた。

なぜ気付かなかったし……

殺されそうになった理由を探していたらいつの間にか目の前に壁、
後ろは造物主ライフメイカーという絶望的な状況である。

というかラスボスと鬼ごっこことかマジでないんだけど……

「終わりだ！！！」

造物主ライフメイカーの背後から黒い光線……ディスインテグレイト原子分解魔法が放たれる。

いや神力を使えば大丈夫なんだがそれだと星が吹っ飛びかねん。

神力って魔力より制御が難しいんだぜ？

全力なら制御できるけど加減とかの制御は無理。

壊れても鍵があるから直せるけどいちいち直すのもメンドイしなあ

………

ん？鍵？

あっ、そうだその手があった！！

鍵を取り出し、ある能力を使う。
今回使う能力は創造神の掟ではなくもう一つの能力。
その名も……………

「アベアット エンシス・エクソルキザンス
来たれ、ハマノツルギ！！」

魔法具変換能力。

原作にある魔法具などを根源の情報を基に変換する機能である。
それが鍵に付けた能力である。

ここ数百年で新しく付けたものだがこれが中々使える。
あつ、ちなみに魔法具ってアーティファクトのことだからな？
他にもあるにはあるが今は気にしなくてもいいだろう。

「トミー・アルケース・カイ・アナルキアース
うおりゃあ！！無極而太極斬！！！！」

変換したハマノツルギを大段上に構え一気に振り下ろしながら解号
の言葉を叫ぶ。

並みならない筋力で放たれた斬撃は向かってくる魔法を消し去り造
フメイカー物を切り裂いた。

これぞ完全魔法無効化能力者の武器、魔法を一瞬で消し去るとかマ
ジで汚い能力。

「ぐ、くううう…………ガハツ！！！！？」

ライフメイカー造物主はそのまま後ろの壁にまで吹っ飛び激突し転がり落ち、それ
からピクリとも動かなかった。

……………まさか死んだりなんてしてないよな？

S
I
D
E

E
N
D

第十二幕（前書き）

ライフメイカー
造物主の正体は私なりの推測に基づき書いてみました。

詳しくは後書きで。

それではどうぞ。

第十二幕

?????SIDE

馬鹿な、ありえん！

私の魔法をたかが剣一振りで消し去るなど……

あ奴、本当に何者だ？

くっ、とにかく起き上がらなければ……

「うっ！？く…ぐっ！！？」

ダメージが大きすぎる。

このままでは立つこともままならない。

「『治癒』^{ケール}」

体に治癒魔法を掛け、肉体の再生を早める。

我は不老不死ではあるが再生力があるわけではない、せいぜい普通の人間より傷が治るのが早いぐらいである。

立ち上がれるくらいには回復してきたため立ち上がる。

「あつ、何だ生きてたのか。いや、悪い悪い。焦って少々本気で振ったんだけど生きててよかった」

「……………ずいぶんと白々しいな」

「先に襲ってきたのはそっちだろ？」

「何十にも張った認識障害と転移妨害を無視して人の工房に転移、さらに我の目的を知っている時点で貴様の危険度は一気に上がった。排除しようとするのは当然の行動だ」

「そうか……………で？まだやるのか？」

「いや…それはやめておこう」

さっきの一撃でわかったが、この男まったく本気ではなかった。

我の魔法を避け続けたはずなのだが身体強化の魔法を使った痕跡がない。

つまり強化なしの身体能力で我の魔法を避けていたということになる。

……………理不尽だ。このようなことマスター師匠以来ではないか？

マスター師匠もマスター師匠でおかしかったからな……………

魔法どころか魔力すら使わずに敵を一瞬で消し去るなど反則の塊であつたからな。

マスター師匠が言うには「存在そのものを解除する俺だけの固有技能だ」など言っていた。

今も思うのだが彼が死んだなどやはり信じられん。

その内ひよっこり顔を出すのではないかと思う。

「あー、それでさ…そろそろお互い自己紹介しないか？俺はお前と敵対するつもりじゃないわけだし……………」

「む？……………ふむ、そうだな。では名乗ろう、我の名はアマテル・ウエスペルティアア。少々長生きしている魔法使いだ」

我はローブのフードを取りながら名乗った。

S I D E O U T

アステルS I D E

What?

フードを取った造物主^{ライフメイカー}、いやアマテルの素顔を見て驚いた。

何せ目の前にいるのは俺が数百年前に鍛えてやったかつての弟子が成長した姿だったからだ。

気付かれないように原初の聖痕を使い解析してみたが式のパターンが一致したため弟子本人であることは間違いなかった。

……… 未来のラスボスは俺の弟子だったようです。

「む？どうしたかしたか？」

「あー、いや何でもない」

「ふむ、そうか。………して汝の名は？」

ウェイイ、ついに来たぜ。

死んだはずの人間がいきなり出てきたらどんな反応するか………
すごく楽しみ。

ローブのフードに手を掛けて取る。

「……………え……………？」

「久しぶりだなアマテル。お前の師匠マスターのアステル様のご登場だぞ？」

「え……………あ……………師匠マスター？何で生きて……………？」

「アホ、かつてに殺すな。だいたいお前の師匠マスターが死ぬわけないだろ？弟子なら死亡偽装くらい見破れ」

「無茶言わないで下さいよう……………」

声に元気が無くなり、目に涙を溜めて今にも泣きそうな弟子に近づき頭を撫でて安心させてやる。
そして

「久しぶりアマテル」

「お久しぶりです師匠マスター」

と言ってやった。

まあこれが弟子との再会だったわけだ。

S I D E E N D

第十二幕（後書き）

アステル「なあ、この小説の造物主ライフメイカーが弟子アマテルなのは何でだ？」

天剣「アレだよ造物主ライフメイカーの素顔ライフメイカーつてもものすごく中性的だったから最初どっちにしようか迷ったんだよ」

アステル「うんうん」

天剣「結局どっちにしようか迷った結果、この世界の造物主的な位置にいるのが君になりつつあるからその弟子兼義理の娘みたいな感じにしようかなあ」と思いました」

アステル「ふ〜ん、なるほどね〜…って、おい！弟子が義理の娘ってどういうことだ！？そこはヒロインとかじゃないのか！！！！？」

天剣「逆に聞くけど君の年齢に釣り合う女性っているの？ぶつちやけ君ってヒロインいらぬような気がしてきてるんだよ？」

アステル「マジかよ…………orz」

天剣「あつ、ちなみに私の考えだと原作では造物主アマテルじゃないと思うけどね」

アステル「…………それは何でだ？」

天剣「（おっ、立ち直った）墓所の主の存在があるからさ。もしかしたら彼女が原作でのアマテルかもしれないからだよ。それかアマ

テル自体が原作に出ないかのどれかだね。後個人的な感想、もし造
物主が女性フメイカだったらゼクトやナギの体を奪っても性別的に何か私は
嫌だ。いくら始まりの魔法使いでも体奪ってでの性別の超越はダメ
だと思う」

アステル「何てどうでもいい感想……………」

天剣「とまあ議論はこの辺にしてまた」

アステル「じゃね……………」

アステル「ねえ、マジでヒロインいないのこの小説？」

天剣「考えはあるよ。しかし私はやったことのないゲームだからな
……………まあ頑張って知識集めするよ」

アステル「ちなみに当てのあるヒロインについて何か一言」

天剣「……………怒りの日」

アステル「彘？」

ちゃんちゃん

第十三幕（前書き）

駄文です。

とんでもないくらいの駄文です。

それでも読みたい人はどうぞ！

第十三幕

アステルSIDE

結局、あの後アマテルが泣き出してしまったのであやす羽目になった。

とはいえその原因は俺にあるというのは何とも情けない話である。

まあ俺からすれば娘のような存在だから微笑ましいのだが……

さて、そんなわけでアマテルとの工房での同棲生活が始まりました。とはいえ俺が押し掛けただけなんだがな。

ちなみにアマテルは散々泣いた後、作業に戻った。

どうやら俺の事は放置らしい。

……………弟子の癖に師匠をほったらかすとは。

まあ弟子以前にもう一人前の魔法使いだし、アマテルも今は幻想世界の創造に力を入れたいからとも言っていた。

ついでに終わったら甘えるとも。

どうもうちの娘はまだ反抗期ではなく甘えたいお年頃のようなのだ。

閑話休題

さて、娘の話はこれくらいにして。（いつから娘になったんだよとかの突っ込みはするなよ？）

ご存知の通り魔法世界の創造はまだ先になりそうなため俺は気長に待っている。

我が弟子アマテルが創り出そうとしている幻想世界、しかしその幻想世界には問題点がある。

膨大な量の魔力をどこから持ってくるのか？という至極簡単にして難しい問題だ。

彼女の魔力量は並みの魔法使いと比べたら天と地、月とスッポンである。

だがしかし、それだけの差があっても世界を創り出すにはまったく足りない。

俺の魔力を使うかと思ったんだがこれは弟子の挑戦のため俺がでしゃばる道理もない。

とはいえ無限の魔力というのは彼女にとっては問題点が簡単に解決するもの。

しかも無限の魔力があれば永久に幻想世界を展開できるのである。そんな身近なマジックアイテムがあるわけでした……………

まああれだ何が言いたいかと言うと

「魔道書に積んである魔力を無限にする機能の術式を見たいと？」

「駄目ですか？」

「いや、別に構わんよ」

というより、よく魔道書のこと覚えていたな。

これのこと話したの一回だけじゃなかったっけ？

と思いつつ彼女に魔道書を渡す。

ちなみに今は魔道書の資格ない奴見たら発狂する設定は解除している。

「ほれ、取り扱いに注意しろよ？どっかのページに載ってたはずだから自分で探せ」

「ありがとうございます、^{マスター}師匠」

と言いアマテルは研究室に戻った。
やれやれ魔法世界ができるのはいつになる事やら……

時はB・C・3100年。

魔道書に取り付けてある魔力を無限にする機関…無限回路をアマテルが解析してから数百年ほど経った。
途中、何千年以上掛かる事がわかったため、外と中の時間差が違う魔法具…ダイオラマ魔法球を作製した。そして現在、魔法世界が生み出された。

というわけで……………

「アマテルうゝ、俺しばらく旧世界に行ってるから後はGAN
B A R E !」

「え、ちよつ、^{マスター}師匠!?!」

「Good - Bye !」

と言って鍵を使い転移した。

S I D E O U T

アマテルSIDE

「はあく、あなたという人はどうしていつも突発的なんですかね？」

私の師：アステルは、私なんかとは大違いの人だ。

行動はいつも突発的だし、他人の事などお構い無しに迷惑を掛ける。

主に私に……………（泣）

昔なら多くの魔法使いがいたおかげで被害が分散されたが、今は私しかないためすべて私に帰って来る。

はっきり言って迷惑千万である（泣）

しかし弟子としての私から見ればその行いは驚きに値する。

だってそうでしょう？この世界で魔法使いとしての彼の技量を目にすれば、あの人は完成を通り越して完了していると言っても過言ではないのだから。

戦闘者としても最強の領域において、誰も並ぶ事のない無類の強さを発揮する存在^{バケモノ}。

あなたに勝てるモノなど存在するのか？

私は昔、そう自分の疑問を師匠^{マスター}に投げ掛けた事がある。

彼は「あるとも。何故なら俺は最強と言われようとも無敵ではない。どのような存在もいつかは負ける。それが何者であれ、な。」

いいか、よく聞いて理解しろ？強者が恐れるの弱者じゃないさらに上に立つ存在だ。まあもつとも、この持論は戦闘者にしか通用しないがな」と言った。

では無敵であれば恐れるものはないのか？とも聞いた。

「そうじゃない。確かに無敵なら恐れる存在は何もないが所詮それだけ。その存在にもまた上には上がいる」と言っていた。

その意味はよくわからなかったが師匠マスターに「気にするな」と言われたため、忘れ去った。

しかし、改めて思い直しても師匠マスターにその定義は当て嵌まらないと思っ

結論から言えばあの人は反則であるとしか言えません。

「はあ、考えた私が馬鹿だった。……………忘れよう」

まあ帰ってきたら O H A N A S H I ですけどね。
それが心配で掛けられる人である私の役割ですから。

S I D E E N D

第十三幕（後書き）

アステル「おいイツ！？わけのわからん文だったが、最後のは明らかにO H A N A S H I フラグだろ！！？何書いちゃってんだよ！！！？」

天剣「いや、ついやってしまった。というより内容がまとめられなくなっただよね」

アステル「今すぐ書き直しやがれ！！！」

天剣「無茶言わないでよ。まあここらでまた武器を創らせてあげるから勘弁して」

アステル「……………何を創らせるんだ？」

天剣「それは次回のお楽しみという事で」

アマテル「あれ、私出番なしですか？」(泣)

第十四幕（前書き）

今回の文はかなりグダグダです。

説明とかオリジナルや独自解釈以前に中途半端過ぎるので読まない方がいいかもしれません。

それでも読みたい人はどうぞ。

第十四幕

アステルSIDE

さて、俺が旅に出てまたもや数百年経った。

この期間に創り出した魔法具は数知れず……

とはいえ管理するのが面倒になったため、旅の途中…知り合った者達に手当たり次第渡していった。

剣の中で究極の一と言われる武器を王に献上した。

影の地を統べる女性に呪いの魔槍を捧げた。

最強の幻想と言われる聖剣を湖の精霊に渡した。

一つ一つが最強と言える武器。

それらを道行く先々で出会う人に与えた。

彼／彼女らはその手に俺の創り出した武器を持ち、歴史に名を刻む。

とまあいろいろな神話わきごとに関与しました。

多分載らないと思うけど……

閑話休題

とりあえず過去の事は置いておこう。

現在俺は、彼の者を貫いた槍を生み出そうとしている。

いきなりで何言ってるんみたいな目で見るなよ？

まあそれを何回錬成してもうまくいかない。

そりゃそうだ。元々年代的に存在するのはもっと後だし、何よりも彼の者を貰いたという概念がなければ創りようがないからだ。そもそも聖槍が欲しいと思ったのは、魔術について調べた時、とある魔術を見つけたからである。

名を永劫破壊エイウエイヒカイト…魂を燃料とし発動させる複合魔術である。

聖遺物を兵器として武装化し、超常の力を行使する理論体系。

殺せば殺すほどに戦力を増大させることが可能であり、聖遺物を砕かれれば、聖遺物使いも砕け散る。

聖遺物による攻撃は、物理的・霊的、両面で防がなければ止められないというもの。

聖遺物の加護がある限り、聖遺物使いは不老であり不死。

殺した人間の数に相当する霊的装甲を常時纏う。

そしてこれらは総ては‘座’への到達者を生むために水銀の王が用意したものである。

とても凶悪だが俺としては使い勝手のいい代物として認識しているため創る事にはしてみた。

何せ常人なら即死し、たとえ実体をもたない死霊の類であっても武装化した聖遺物の秘奥はあらゆるものを殺傷する。

人であれ、魔であれ、神であれ、戦えば塵殺ちんころである。

修羅の戦鬼のみが振るえる禁断の遺産とその攻撃を無効化する方法は事実上存在しないのだ。

これほど最凶で凶悪で最悪で最強で最高の武器があるだろうか？

俺も最強と言える能力は持っているが、そのすべてが一撃必殺以前に問題大有りの代物だ。

何しろ神になつた事で無限と言える神力を持っているのだ。

敵の性能云々の前に俺の能力が強すぎて話にならない。

その点聖遺物ならちようどいいチート具合だと思っ。
すでに術式の解析は済み、改変も終わっている。
後は素体を手に入れ契約するだけだ。
さて、面白い事になりそうだ。

A・D・30年。

この日になるまで何度かちよくちよく魔法世界に帰った。
最初に帰った時は弟子が一国の女王になってたためビックリした。
まあその時の記念に最後の鍵を創グレートブランドマスターキーってやった。

能力？原作と同じだが何か？

一応使い方を教えておいたため問題はない。
アマテルなら悪いように使わないだろうと思う。
そしていつだったかは忘れたが次に帰った時はさらに驚いた。
何がかつて？子供ができてたんだよ。

いや、俺もあの時は驚いた。
驚きすぎてうっかり魔法世界の構成術式を解除しちゃった(笑)
まあそれやりかけた時アマテルとその婿にボコボコにされたんだけどね？

閑話休題

と、まあそんな話はこの辺にしておいて。

現在俺はゴルゴダの丘にいる。

理由は彼の者を貫いた槍を手に入れるためだ。

認識障害の魔法を掛けて槍を手に入れる機会を窺う。

すでに彼の者は死に絶えたため、今槍を持った男が彼の者の脇腹を貫いている最中だ。

槍を引き抜く男。

チャンス。

あらかじめ出しておいた鍵を使い世界に干渉し、時を一時的に止めて彼の者を貫いた槍を持つ男の元まで行く。

そして倉庫から槍を取り出し神槍と交換してその場を立ち去る。

さうして、早くこの素体を聖遺物にして契約するか。

S I D E E N D

第十四幕（後書き）

アステル「いつにもましてグダグダな文だな？」

天剣「自分でも途中から何書いてんのかわからなくなったよ」

次回もお楽しみに！

第十五幕（前書き）

ようやくできたあ——！！
それではどうぞ——！！

第十五幕

アステルSIDE

さて、俺が聖遺物との契約をしてから数百年。

ここ最近では聖遺物の強化のために魂を得るため人殺し三昧である。

ん？殺した事もないのにそんなに簡単に殺せるのかつて？

あー…まあアレだ、長年生きた所為なのか精神的に何も感じなくなつたみたいなんだわ（笑）

ちなみに殺している人はちゃんと選別しているよ？

現在保有している魂はそろそろ数千万に行きそうだ。

ちなみに俺が契約した聖遺物の名はロングヌスランゼ・テストメント聖約・運命の神槍、形態は武装

具現型で現在の位階は流出、少々改造を重ねた結果、元々の能力に加え「己以外の存在を貫いた時、能力を剥奪し己がものとする」というチート能力が増えた。

ちなみに改変したエイヴィヒカイト永劫破壊の説明をすると……………

渴望が無くとも十全に聖遺物を扱う事ができる。

という風に改変した。

自分で言うのも何だが元からチートだったのにさらにチートになつたな。

とはいえ聖遺物を形成している時は持つてる能力と武器は使えないようにしておいたから問題ない……………多分。

閑話休題

さて、聖遺物の話はこれぐらいにしよつ。

今俺はウエスペルタティア王国にいる。いや正確には墓守り人の宮殿にいるんだがな。

まあ、里帰り…と言ったところか？

アマテルの奴、元気にしてるかなあ………

「父上、いつも言ってるじゃないですか？帰ってくるなら連絡ぐら
いして下さって」

「あゝ…うん、悪い悪い。次から」

「次から気を付ける、何て言いませんよね？」

「(、・、・、)」

何故先に言うし……

「何故先に……っという顔してますね」

「わかるのか？」

「それはまあ……娘ですから」

「父ですから」

「意味わかりません……」

「俺もだ……」

言った本人も理解できないって…それ頭やばくね？

おっと、今のはカットで頼むよ……俺は別に頭やばくないからね？
所変わって宮殿内部……いや、別に普通に來ただけなのにこの歓迎
はなに？

まあ歓迎も何もアマテルだけしかいないが……

「今戻りました。造物主^{ライフメイカー}」

しばらくアマテルと話していると部屋に白髪無表情二枚目顔がやつてきた。

ていうか、誰だコイツ……？

「あつ、遅かったですね^{プリムム}一番目？どこ行ってたんですか？」

「少し紛争地帯に……最近魔法世界で大規模な戦争が各地で起きているのでその様子を……そちらの方は？」

「私の父です」

「娘の父です」

とりあえず自己紹介しておく。

……ん？自己紹介になつてないじゃないかって？
こまけえこたあいいんだよー！

「いやちゃんと自己紹介して下さいよ。^{プリムム}一番目が困ってるじゃない

ですか」

フリーム△
「一目と言われた青年を見れば

「無表情のままじゃん」

「ちよっ!?!?そういう事言わないでくださいよ!?!?.....ああほ
ら、フリーム△
「一目が落ち込んでるじゃないですか!?!?!?」

フリーム△
そう言われて一目を見るがやはり表情に変化はなかった。
ああでも、何か纏う空気が晴れ晴れしくないような気がするな。

「まあそんな事は置いといて」

「いや置かないで下さい!」

フリーム△
「いやもういいだろ?.....それで一目だけ?君はアマテルと
はどんな関係なのかな?返答しだいじゃ.....ただじゃおかないよ
?」

俺はニッコリと笑みを浮かべながら抑えていた威圧感を出した。
娘に近づく輩は.....消去シナキヤナ?

S I D E O U T

アマテル S I D E

す。

「それでどうなのかな？」

「……………（お願いだからうまく答えて！一番目！）」

「……………僕は造物主ライフメイカーの使徒です。それ以上でもそれ以下でもありません」

「ナイス！さすが一番目ブリームム！あなたのおかげで魔法世界ムンドウス・マギクスは救われました！……！」

「……………まああなたが助かるかは別ですけどね？さあ、潔くこの世界のために犠牲イケニエになりなさい！」

「なるほど、使徒か……………」

父上はそう言って黙ってしまいました。

あれ？珍しいですね？あんな理由で納得したんですかね？

S I D E O U T

アステル S I D E

出していた威圧感をもう一度抑えて思案する。

使徒……………

そういえば原作では確か造物主アマテルの従者みたいなのがいたような気がするな。

なるほど一番目コイツだったのか。

確かに白髪無表情二枚目顔だし……………

ん？という事は……………

アマテル 俺の娘。

アマテル 一番目の母親フリームム（みたいな感じ）

一番目フリームム 俺の孫？

フリームム
「よし一番目フリームム、今日から俺の事は偉大な主グランマスター、もしくはマスターと呼べ。間違ってもお爺ちゃんなんて言つなよ？」

「え！？」

「わかりました、マスター」

「うむ、いい子だ。……で、どうしたアマテル驚いた顔をして」

「……………何でもないです」

「そうか?」

変な奴だな? まあいいか。

S I D E E N D

第十五幕（後書き）

アステル「一番目^{プリムム}がようやく出演したな？」

天剣「ホントだよ。ようやくここまで来れたよ」

アマテル「原作まで後どれくらいするんでしょうね？」

アステル「わからん。まあ少なくとも原作そのものがすでにぶっ壊れてるからな。どうにでもなると思うぞ？」

天剣「まあまあ、そういう事は気にしないでいいの君達は」

それでは次回も宜しく！

フリーム△
「一番目「僕、あまり話してなかったけど？」

天剣「君の話し方はシリアスでしか出せないような気がするから、
もう少し待ってて」

第十六幕（前書き）

何日か振りに書けた。

というか実は沖縄まで修学旅行に行つて帰つて来たら風邪引いた。

なのでかなり文がやばいかも……

読みたくなかつたら読まなくていいよ。

でも読んでほしい。

ダメだ相変わらずの駄文だな。

早く風邪治そう。

というわけでどうぞぞ！

今回は戦闘描写を入れてみました。

かなりクオリティが低いけどね（苦笑）

第十六幕

アステルSIDE

ハローハロー皆さん、アステルです。

現在魔法世界の紛争地帯にいます。

あれからさらに数百年……アレ？そろそろA・D・1000年越えるんじゃない？

とか考えながら威圧感出しまくりで戦場を歩き回ってます。

ええ、そうです。歩いているだけでみんな死んでいきます。

魂を喰らいすぎたかな？そろそろ一億突破しそうだよ（笑）

4割程魔法世界人の魂が混じってるけどね？

魔法世界人は超高度な幻想生命体だけで魂がないわけじゃない。

九十九神的なモンだから魂もちゃんと有るのだよ。

歩く歩く歩く……が、誰も俺の進行を阻む存在はない。

ある者はその威圧に吞まれ死に、またある者はその威圧に逆らい俺に近づくがその所為でポツクリ逝く。

まあここにいるのは魔法世界人だから別に問題ない。

肉体が完璧に朽ちれば魔力に還るし。

魔法世界人の魂は人間の魂と違ってひどく脆いから簡単に砕けてしまふ。

まあ取り込めば問題ないんだけどね？

「で、さっきから俺の事をつけてる君。何かようかな？」

ここ数百年でこの世界に入って来た異物。
俗に言う転生者という存在が俺の後ろにいた。

「よく気づいたな、同類。気配を消してたんだが気づかれるとは思わなかったぞ？」

「いやいやあんなんで気配消してたとか拙さ過ぎるよ、君？
しかも同類ってお前と一緒にするなよ。」

どうせ下級、中級神辺りに転生させてもらったんだらう？

最高神によつて転生、ましてや爺に次ぐ神の俺とではもはや同類なんて言えないよ？

壊れた建物の物陰から出てきた男。

逆立った黄金の髪に真紅の双眸。

……………まんまギルガメッシュじゃないか。

「さっそくで悪いんだが 死んでくれ」

目の前のギルガメッシュの姿をした男の背後の空間が歪み、刀剣、

斧槍

神剣魔剣聖剣名剣神斧魔斧神刀魔刀名刀

神槍魔槍

が飛んで来た。

「『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』かよ……………」

とりあえず避ける事にする。

あれだけの速度で撃ち出される宝具を喰らったらそのまま吹っ飛びかねん。

最悪貫通するかもね。

通り過ぎていく宝具は地面に激突しクレーターを穿っていく。

「ほお、少しはやるようだな。なら……これならどうだ！」

さっきの倍、そのまた倍と撃ち出される宝具の量は徐々に増えていった。

これ少しヤバイんじゃない？

このまま行くと蜂の巣ENDになるな、うん。
というわけで俺も手札を一つ切る事にする。

聖遺物？んなモン使ったら勝負にすらならん。
倉庫から一振りの聖剣の宝具を取り出す。

そして……

「改造宝具真名解放、『エクスカリパー約束された勝利の鞭』」

その力を解放した。

S I D E O U T

??? ? S I D E

ようやくだぜ！まさかこんな所で会えるなんてな！！

突然だが俺は転生者だ。

神の野郎にテンプレートの如く殺され、これまたテンプレートの如く転生した。

転生先はネギま！と聞いた時は思わず叫んじまったぜ！

能力を貰う時は俺を転生させた神は位が低いらしくあまりそこまで大量に貰えなかったが自分の欲しかった能力を手に入れられた為よしとした。

そして転生する際に神の野郎が言うには俺が行く転生先はすでに別の奴がいるらしいからそいつを殺して欲しいと頼まれた。

何で神が俺に頼んだかはわからないが俺としても他の転生者がいるのは俺のハーレムの邪魔にしかならないので承諾した。

で、いざ転生したが中々そいつが見つからず今日までずるずると引き摺ってたわけだ。

さて、そろそろ終わらせるか。
ゲート・オブ・バビロン
王の財宝で狙いを定める。

「あばよ転生者！あの世で俺の勇姿でも見てな！！」

大量の宝具が撃ち出された、が……………

「ところがギツチヨン」

男がそう言った瞬間……………

ガキキキーン！キーン！！

その宝具がすべて黄金の帯に叩き落された。

「は……………？」

思わず呆けてしまった。

何だ今のは？

ありえない。今撃ち出された宝具は全部Aランク宝具だ。

それを…かなりの速度で迫っていた宝具を叩き落とすなんてはつきり言って無理だ。

だが目の前のコイツはやって見せた。

そこで俺はふと気が付いた。

宝具を叩き落した光の帯を目で追っていけば眼前の男が手に持つ武器と繋がっていた。

いやそれよりあの柄と鏢の形は……………

「え、『エクスカリバー約束された勝利の剣』だと!？」

姿が変わった宝具を見て俺は驚きの声をあげた。

S I D E O U T

アステル S I D E

改造宝具。

まあ言うなれば宝具に新しい機能を付けたりして自分用にしたものだ。

ちなみに今回取り出した改造宝具は『エクスカリバー約束された勝利の剣』である。本来なら真名解放することで光の斬撃を放つものだが、改造型はその光を鞭のように扱うものである。

熱量で分断することが可能だがこれの特徴は長さと持続性である。魔力を込める事で光の長さの調整ができ、常時真名解放中だが魔力

の消費は通常の『約束された勝利の剣』エクスカリバーの真名解放よりも遥かに少ないため持続力がある。

まあ他にもあるんだけどそれはまた今度で。

「くっ、行け！」

『ゲイト・オブ・バヒロン王の財宝』よりまたも放たれる数多の宝具。

武具の並べ方、狙い、射出速度、どれも中々のモノだ。

この数百年それなりの場数を踏んだのだろう。

しかし……

「くそくそくそくそッ！何でだ！？何で当たらない！！？」

そのすべてが悉く叩き落とされる。

「無駄だ。コイツの本領は守りだ。ただ宝具を撃ち出す事しかできないお前の宝具とコイツならこっちの方に分があるぞ？」

と助言してやった。

まあぶっちゃけこっちには聖遺物があるからこれを攻略しようが結末は変わらないんだけどね？

「なら……これでどうだ！？」

そうやって男：ギルガメッシュが取り出したのは黒に真空の紋様が入った三つの円筒を縦に並べた武器。

「……………ああ、乖離剣か……………」

剣における究極の一だっけ？

まああの世界と同等の力を持っているみたいだけどそれは人間用の武器であって神の使うのモノなら一振りで列島を更地にできるけどね？

おっとそんな事を考えてる間にあっちの準備は完了したみたいだ。

「『エヌマ・エリシュ天地乖離す開闢の星』!!!」

空間断裂を起こす武器より放たれた一撃は、例え偽物であろうと今の俺に致命傷を負わせるぐらいなら十分な威力だ。
だから……

「 形成《Yetzirah》 聖約・運命の神槍《Longinuzlanze Testament》」

少々本気でやるっか……

S I D E E N D

第十六幕（後書き）

作者「この小説ももうダメだな」

アステル「最初からだと思っぞ?」

作者「なればやるしかあるまい」

アステル「何をだ?」

作者「彼の水銀の王がしたとされる回帰を……究極のリセットを今
私を行う!」

アステル「やらせねーよ?」めきやッ

作者「ぐはっ!」

第十七幕（前書き）

ヒヤッハアー 投降だあー！

駄文ですがどうぞ。

ヒヤッハアー 創造だあー！

無理矢理過ぎたかな？

第十七幕

S I D E O T H E R

「やったか……?」

初っ端から死亡フラグを建てた男 ギルガメッシュはそう呟いた。

彼にとって最高にして最強の一撃を放ったのだ。効いてくれなくて困るのだろう。
が、しかし……

「その男は墓に住み あらゆる者も あらゆる鎖も
Dieser Mann wohnte in den Gr
uften, und niemand konnte ihm
keine mehr,

あらゆる総てをもつてしても繋ぎ止めることが出来ない
nicht sogar mit einer Kette, b
inden.

彼は縛鎖を千切り 枷を壊し 狂い泣き叫ぶ墓の主

Er ris die Ketten auseinander
und brach die Eisen auf seinen
Fusen.

この世のありとあらゆるモノ総て 彼を抑える力を持たない
Niemand war stark genug, um ih

n zu unterwerfen .

ゆえ 神は問われた 貴様は何者か

Dann fragte ihn Jesus . Was ist
ihr Name ?

愚問なり 無知蒙昧 知らぬならば答えよう

Es ist eine dumme Frage . Ich a
nsworte .

我が名はレギオン

Mein Name ist Legion 「

それは破滅の詠唱、黄金の獣と言われた者が全力を出す為に己の渴望に則り生み出した世界。

それが今この世界にて顕現する。

「 創造《Briah》 至高天 黄金冠す第五宇宙《Glad
sheimr Gullinkambi funfte Welt
all》 「

魔城の存在する空間に呑み込まれたギルガメッシュ……………

彼の目の前に先ほど自らが放った一撃を受けた男…アステルが姿を見せた。

黄金に輝く槍を携えて。

「生きてる……………だと……………？」

「何だ？そんなに不思議か？だとしたらお前は自分の力を過信しすぎていたようだな？」

遠回しに、まるであの程度では自分を殺す事など無理だとも言うアステル。

「何でだ！？何で生きていられる！！？天地を裂いたと言われる剣の一撃を受けて何で平気なんだ！！！それにどこだここは！！！」

「それを知りたいのか？これから死に行くお前如きが？」

「俺はまだ死なない！」

先程から自分の頭に警鐘を鳴らしている本能に従い、ギルガメッシュは王の財宝を展開し一斉に射出する。

「無駄だ」

そう言ったアステルは黄金の槍に魔力を込め、神槍を一振りする事で魔力の籠った一撃を放ち、飛ばされた宝具を消し飛ばす。

その一撃はギルガメッシュにまで一瞬で到達し、彼は声を上げる暇もなく死んだ。

何という呆気ない幕引き。

しかし、彼の力であればこの程度造作もない。

現実世界で本気を出せない彼は奇しくも黄金の獣と似たような渴望を持っていいのかも知らない。

しかし彼の改変した永劫破壊は渴望いらすないのでそれを必要とする事はないだろう。

しかしそれでも性能を落とさず本家と同等なのは彼が優秀だからだろう。

そして、今ここに新たなる戦奴がアステルの軍団レギオンに加わった。

S I D E E N D

第十八幕

アステルSIDE

創造を解除し、元の空間に戻る。

場所はさっきまでいた紛争地帯だ。

とは言っても俺の周りほとんどんパチやっていないが……

まあさっきの戦闘の余波で残っていた奴らも死んだんだろう。

一応本当に誰もいないか確かめてから行くか。

そう思い俺は周囲を探索し始めた。

「あ、宝具回収しとこ」

後片付けはちゃんとしとかないとな。

最近ますます紛争が激化していつて、面倒になってきた。

理由としてあげれば、旧世界から来た魔法使い達が魔法世界の北側を拠点として元から住んでいた亜人を追い出して自分達の国を造っている、と言ったところだ。

今は紛争で孤児になった者を保護しているが、それもいつか間に合わなくなるだろう。

今稼動しているアーウェルンクス・シリーズも一番目フリームムだけだし……え？俺が動けばいいんじゃないかって？

働いているぞ？ああそうさ、決してあのニート神のようになってないさ。

閑話休題

脱線したな、話を戻すぞ。

とりあえずこのまま行くと犠牲が増えるだけなので、こういった事を裏から操作する為に組織が作られる事になった。

組織名は完全なる世界。コスモエンテレケイア そうあの組織だ。

ちなみに造物主をトップとした組織である。アマテル

しかしこれは表での話した。

いや大多数の人間はアマテルがトップであることを知らない。

何せこの組織、一般の団員は幹部が数人いて、それが取り仕切っているとしか思わないだろう。

とはいえ、その幹部にも造物主アマテルがトップの事を知っている奴は一部だけで……

そしてアマテルの上に何故か俺がいるんだよねえ………

あるえ〜？

まあ言うなればこれが裏の話だ。

アマテルがシークレットなら俺はその上に行くシークレットらしいんだわ（笑）

とはいえ実質上組織での働きは俺には無く。

変わりに紛争で孤児になった者の保護をしている。

まあ俺としても書類仕事のものは嫌だから紛争地帯で駆け回っている。

今回は少々驚いたがな。

あー、そついや回収した宝具を改造しとかなきゃな。

道具は有効に使わないと……………

それから最高神（せいこうしん）に会いに行つて何で俺の（創つくった）世界に転生者なんて奴がいるのか聞いとかないとな。

ついでにこの世界に入れたのを伝えなかったからこれをネタにゆすつて何か貰おう。

「それがいい、そうしよう」

後日独り言を呟つぶやいているのを誰かに見られていたらしく、頭がかわいそうな奴と噂された。

噂した流した奴ちよつと出てこい。グラス Heim 城で一緒に戦闘舞ダンスしようじゃないか？

S I D E E N D

〈とある無限神と最高神の会話〉

ここは神界。俗に言えば神の住まう場所。
その神界のとある場所で最高神と無限神はいた。

「で、どういう事なんだ？何で俺の世界に転生者がいた？」

「それがのう、お主に対していい感情を持っておらん奴がおつて
な？その神の仕業なんじゃよ」

「……………何で俺を狙った？」

「お主が新参者なのが気に入らんのだじゃよ」

「新参者？……………そういう事が」

「そういう事じゃ。誰だってお主のような者が出たら妬ましく思っ
じゃろ？」

「つまり今回は俺の方が悪いと？」

「そうは言つとらん。今回は一時の感情の暴走の結果なんじゃろ。
ワシの時もあった事じゃしな」

「アンタの時もあったのか？」

「ワシなんて四六時中狙われとつたぞ？それに比べたらお前さんの
方がまだかわいいもんじゃわい」

「ふん」

「……………ワシが言うのも何じゃが気にせんのか？」

「前々……むしろ次来たらまた軍団レキオンに加えてやるわ」

「そうか……」

「ところで、何で俺に転生者が来る事を伝えなかったんだ？」

「あゝ、それはのおゝ……」

「……」

「……」

「……」

「……」

突然黙り込んだ無限神を見て同じく最高神も黙ってしまった。

「……おい」

「（ビクッ）な、何じゃ」

「まさか働いてなかったなんて事……ナイヨナ？」

「あ、ああああ、当たり前じゃろ！？」

「本当ダナ？」

「も、もちろんじゃ」

「そうか、お前の娘さんにやってなかったら報告しようかと思ったんだが………なあ翁？実は俺の能力じゃ創れない代物があったな？それがほしいんだが………頼めるか？（ニッコリ）」

最高神に向かつて微笑みながら頼み事をする無限神。その顔は、女神や人間界の女性が見ればコロツと落ちてしまう程の威力を持っているが最高神からすれば悪魔の微笑である。

さすが無限神。自分で言った事を有言実行するあたりその腹黒さが目に浮かぶ。

「……………何が欲しいんじゃ。」

「……………が欲しいんだが……………」

「それくらいなら別に良いが……………」

「ありがとよ。んじゃ、頼んだぜ？」

そうして用件が済んだ無限神は神界を去った。

「やれやれ、困った奴じゃ。」

そう言いながら最高神もこの場を後にした。

第十九幕（前書き）

ようやく書き終えた……
更新が遅れてすみません m (| |) m
いつも通りの駄文です。
ではどうぞ！

第十九幕

アステルSIDE

「暇だ〜……………」

墓守人の宮殿のとある一室　　俗に言う居間　　で完全にだらけきって何か面白い事ないかなあ〜などと考えているアステルです。悠久の時を生きる俺にとって何かしらの厄介事イベントが定期的に無いと退屈すぎて死んでしまう。

……………死ねないんだけどね？

ここ最近は何事もない地域へ回る事も無かった為……………あれ？

俺ニート化してね？

……………YA B A I!

これは不味い。非常に不味い。

何が悲しくてあんなニートみたいなポジションに付かなきゃならん

……………

この状況を打破する方法はただ一つ、つまり……………働く事だ！

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
やっぱニートでいいや、俺。

働くとかダルいし、メンドイし、疲れるし、だったらニートでもいいかなあ〜と思う。

まあ暇なのは事実だから研究室戻って錬成改造で何か創るとしよう。

S I D E O U T

アマテル S I D E

「これは困りましたね……」

まさかこんな事になるなんて……

「とりあえず父上に報告でもしましょうかね？」

最近働いてないですし……ニート思考になってなければいいんですけど……

そう思いながら父上の現在いる場所を魔法で割り出す。

「ふむ、研究室ですか……」

また何か創っているんでしょうか？それとも……

そう考えつつ件の部屋に到着、扉を見れば……

現在魔法具錬成中、入る時はノックしてね？

という言葉が書かれているプレートが掛けられていた。そのまま一度ノックをすると扉が内側に開いた。

「入れ」

奥から声がして言われた通り入室する。

部屋の中では父上が作業台で魔法具を創っていた。

「アマテルか、どうした？何かあったのか？」

作業を止めこちらに振り向いた父上がそう言った。

「ええつとですねえ、あつたといえはあつたんですけど……」

私としては内心父上が真面目に作業していた方に内心驚いていた。何しろこの父親の宮殿内ではいつもダラけているからだ。こうして何かを熱心に取り組んでいる事の方が稀だ。

「???どうかしたか本当に……?」

「何でもありませんよ。それより不味い事態になりました」

「不味い事態？何だそれ？」

「至極簡単に言ってしまいますと……」

「うん」

「蔵書室にある禁書ランクの魔道書が一冊盗まれたみたいなんです」
「よ」

「……………は？（。。）」

おお、父上が呆気にとられるとは、なかなかレアですね？

「……………マジ？」

「マジです」

いやー私も驚きましたよ？

蔵書室から魔道書を盗まれるなんて前代未聞ですからねえ。
というか司書は一体何をやっているんでしょうか？

「……………盗まれたのって何の魔道書？」

父上がそう聞いてきました。

盗まれた魔道書ですか？たしか……………

「コード・エメン生命原典です」

瞬間、今度こそ父上が固まってしまいました。

S I D E E N D

第十九幕（後書き）

アステル「コトド・エデン生命原典って何さ？」

天剣「それは次回説明するよ」

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1229x/>

魔法先生ネギま！～万能なる存在～

2011年11月29日00時35分発行